登山活動におけるリスクはあらゆる場面で付いてきます。リスクを低く(小)すると、山行きの面白みは低下します。苦しく、困難な登山に高いリスクは付きもので、それを越えるのは容易ではなくても、これらを乗り越えた後には充実感と達成感が得られ、後々までも各自の思い出に深く残るものです。

低リスクと達成感の間には相反するものがあります。

我々は登山活動の中でリスクを上手くコントロールし、リスクに出会ってもそれが致命的なリスクにならないようコントロールする必要がある。

それには登山者が登山形態に応じた技術と知識を確実に身に付ける必要がある。

所謂、リスクマネージメント「リスク管理」である。「登山形態に応じた登山技術と知識」を持ち合わせない者がそれを行うと危険な登山になりかねないものです。組織内でリスクマネージメントを効率よく進めるために高い技術と知識を持った指導者の養成が必要である。リスクマネージメントの進め方（手法）については岳連内で慎重に討議検討する必要がある。組織内で進める「リスクマネージメント」の結果は横展開できるように遭対委員会に報告集中出来るのが理想である。

岳連内でアルパインクライミング指導者が年々減少し、高齢化しているのが現状である中、今一度、現状を見直し、何らかの手を打つ必要があると感じる。

これは山口県に限らず各都道府県、同じ状況である。各地で優秀な登山指導者は「プロガイド」に転向し、指導者が減少した分、アルパインクライミングはガイドを介したガイド登山に変わりつつあります。

今回、招待した講師の廣川さん、元村さんの講演は技術的にすばらしい内容で特に、元村さんの講演で種々反省させられる点が多くあった。以前から冬期の雪上技術で「雪崩埋没体験」について、中央の講習会などで聴講した内容を鵜呑みに県内で展開していたのは改める必要がある。提供された新しい技術や知識は指導者で確実に検証し、疑問点にはそれへの対応と対策を講じて展開する必要があると感じた。雪崩に関して、「弱層テスト」は山の天候と積雪状況の全体像が見えない環境で行っても無意味である。これは我々の雪崩に対する理解度がいかに低かったかと反省させられた点である。特に元村さんの講演内容にはショックを受けた。